2023/8/6　　「 火と硫黄が降る時代 」　　ルカ 17:20-27

今年も平和主日礼拝の朝を迎えました。しかも今年は８月６日、広島に原爆が投下された日にあたります。世界の平和を祈ると共に、私たちがどのように今日を生きることを主が求めておられるかを、厳粛な思いを持って心に留めたいと思います。

終末に生きている

今朝の箇所は、明確な、聖書が語る終末思想です。50 年前の日本は、ノストラダムスの大予言で世界が滅亡するとオカルト・ブームが既に一部で流行していたようです。現在はさしずめ人造ウイルス世界侵略陰謀説でしょうか。世界が崩壊するという思想は、終末思想と呼ばれ、鎌倉時代の鴨長明が記した『方丈記』なども、その系譜です。どうしようもない状況に直面するとき、世間はこの終末思想に傾きます。しかし、経済が回復し、医療や教育、福祉といった社会の制度が整えられると、次第に終末思想は忘れられていきます。いわゆる「平和ボケ」です。

今朝の箇所は、明確な、聖書が語る終末思想です。イエス様が、世の終わりを教えています。そこには、世の中の終末思想とは大きく異なるところがあります。それは、禍と救いがくっついている、ということです。

人間の防衛本能で、平和を考えるとき、戦争や悪は、なるべく自分たちから遠くに追いやりたい、と考えます。しかし、考えてみれば、それは誰だってそうです。にもかかわらず、摩擦や不利益が衝突となり、不幸にも戦争となるのです。

イエス様は、世の終わりが、神の国の到来とくっついていると言われました。戦争と平和はくっついている、と言い換えることもできると思うのです。

安全地帯はない

続いて、イエス様は、神の国の到来の突然性について語られました。８０年前の８月６日の朝、広島は、一瞬にして地獄の火に呑みこまれました。三日後の長崎も同じでした。何と恐ろしい、人間が悪魔に支配された出来事だったことでしょうか。

ノアの方舟の時代も、ソドムとゴモラを焼いた火と硫黄の光も、その瞬間が訪れるまでは、その街の人々は、まさか自分たちにそのような災いが来るとは思っていませんでした。キーウやオデッサの人々も、深く頷くことでしょう。

ここ京都・山科の地も、戦争から関係ない場所ではありません。私たち一人一人も、明日の我が身は誰にも分からないのです。しかし、イエス様は警告と共に、対策を与えてくださっています。それが、十字架と復活の信仰です。命を生かすものがそれを失い、失うものがそれを保つとは、神様という逃れ場が、私たちの魂の安全地帯であることを教えています。「平和ボケ」から目覚め、真実に今日を生きましょう。

十字架によって罪贖われ、復活によって死を滅ぼす永遠の命が与えられています。